

[特集 I]

第 1 コース

「外国の学校について知ろう 学校を手がかりとした国際理解」

中 田 有 紀*・羽 谷 沙 織*

1. テーマの目的とコース設定の趣旨
2. コース内容と気づいた点
3. レポート課題
4. 小 括

1. テーマの目的とコース設定の趣旨

本コースは、高校生にとって、日頃見聞きする機会の少ない外国の教育について学ぶことを通して、国際理解について考えることを目的とした。本コースは、参加する生徒たちが、与えられた情報に満足することなく、主体的に情報を収集し、「生」の声を聞く、感じることを通して、発見の大切さを知ることを目指した。本コースで扱う「外国」は、コース担当者が現在フィールドワークに取り組んでいる、インドネシア（中田）、カンボジア（羽谷）と設定した。

具体的には、以下の3点の活動を行った。

- ① インターネットや文献を用いて、生徒自らが調べ学習を行う。
- ② インドネシアとカンボジアの教育について、映像を中心とした講義を聴講する。
- ③ インドネシア人とカンボジア人留学生へのインタビューを通して、両国の教育について考える。

2. コース内容と気づいた点

本コースでは、3日間にわたって合計11名の高校生とさまざまな活動を行った。

<一日目> 8月2日（金）

午 前

時 間	活 動 内 容	()は司会者
10:30-10:40	①挨拶、セミナーの目的や課題の説明（羽谷） ②3日間のスケジュールの説明、スケジュール表の配布（中田）	
10:40-11:20	③自己紹介 & アイスブレイキング（中田） セミナーに参加した理由、1コース選択の理由、アジアへの関心など。	
11:20-11:50	④東南アジア諸国の地図づくり 東南アジア諸国の国名を記入してもらう。各国の位置、首都を確認する。	
11:50-11:55	⑤インドネシア調査隊、カンボジア調査隊に分ける。（羽谷）	

* 大学院教育発達科学研究科博士課程

本コースへ参加した生徒は、当初9人の予定が、当日2人増え、合計11人であった。男子6名、女子5名である。午前中は、まず上記①～③の作業を通して、お互いを知り合い、コミュニケーションのとりやすい環境の整備、雰囲気作りに務めた。後半④と⑤の作業では、インドネシアとカンボジアへの関心が高まるよう、白地図を用いて地理的状况を理解し、また担当者から両国と日本のつながりについて説明を受けた。

午後

時間	活動内容
13:00-14:15	①インドネシアとカンボジアの文化、社会、教育についての調べ学習 (インターネット/図書を通しての情報収集)
14:15-14:30	休憩 (15分)
14:30-16:00	②カンボジア調査隊、インドネシア調査隊の発表準備

① 調べ学習

調べ学習の際、以下の2点が作業中の問題として浮上した。

1) コンピューターの不足。

生徒が当日9名から11名に増加したことをうけ、コンピューターを一人一台の割合で使うことができなかった。代表の生徒がマウスを用いて作業することになり、積極的に情報収集ができる生徒とそうでない生徒の差が生じた。また、生徒たちがインターネットで得た情報を、ノートにメモさせるのではなく、プリンターで印刷することを許可したため、プリンターが一台しかなく印刷に予想以上の時間がかかった。

2) 雨天のため中央図書館への移動不可能。

当日は雨のため、中央図書館での文献調査は断念した。インドネシア調査隊は、図書館での文献調査は行わず、引き続きコンピューターを用いて情報収集を行った。他方、カンボジア調査隊は、インターネットによる情報収集が難航していたことをうけ、教室において文献検索することに切り替えた。教室では、担当者があらかじめ用意した8冊の基礎文献を用いて、カンボジア社会、文化、政治、文学について情報を集めた。

② 発表準備

グループ作業を基本に発表用紙(B紙)に情報を整理させた。インドネシア調査班では、女子2名がすばやく用紙に情報を書き移し、女子生徒1名、男子生徒1名の指揮のもと、続いて男子が書き込みはじめた。グループ内での順番を決め、円滑に作業をすることができた。カンボジア調査班は、男女別々に作業を進め、その連結があまりうまくいかなかったが、担当者が指示を出すことによって、活動が進んだ。

生徒たちは、収集した情報をいかに整理し、発表するかに予想以上にとまどっていた。そのため、15:00以降は、各調査隊の調べ学習の結果発表を行う予定であったが、準備ができず、16:00まで発表準備に従事した。発表準備に時間がかかったものの、生徒たちは、各自興味のある情報を見つけることができ、対象に対して少しずつ関心を抱いていく様子も見受けられた。

<二日目> 8月3日(土)

午前

時間	活動内容
10:00-11:00	①調べ学習の発表
11:00-11:10	休憩(10分)
11:10-12:00	②カンボジアの教育についての講義(羽谷)

① 調べ学習の発表

調査隊ごとに調べ学習によって集められた情報を発表してもらった。インドネシア調査班の発表項目は、

- ・一般情報(首都、人口、気候、言語、通貨)
- ・生活(治安、交通、習慣、住まい)
- ・文化(宗教、結婚、民族衣裳、芸術)
- ・その他(娯楽、漫画)

となった。インドネシアの一般情報に加え、ある生徒は、娯楽、特に漫画について詳しく調べることができた。日本の漫画がインドネシアでどれくらい普及しているのかを詳細に調べ発表した。漫画情報へアクセスすることは、担当者が意図しなかったことではあるが、生徒がインドネシアへ興味を持つ糸口になったのではないかと推測する。また、カンボジア調査班の発表項目は、

- ・一般情報(人口、民族、言語、政治)
- ・経済(産業、輸出入、通貨、援助)
- ・社会(文学、食べもの、医療)

となった。カンボジア調査隊は、カンボジアの概要を知る上で必要な情報を整理することができた。文献検索をしたことによって、政治や文学といった詳細な情報を入手し、発表することもできた。

② カンボジアの教育についての講義

担当者である羽谷が、カンボジアの教育についての講義を行った。講義は「カンボジア：ゼロから出発、新たな国をめざして」をテーマとし、①教育を軸にカンボジアの歴史をつかむ、②現在のカンボジアが抱える教育的問題を理解する、ことを目的とした。具体的な講義内容は、カンボジアの現代史の概説、また1990年代の教育の復興、開発、援助についてであった。生徒はビデオやスライドを真剣な眼差しで見っていた。

午後

時間	活動内容
13:20-14:20 ¹⁾	①インドネシアの教育についての講義(中田)
14:20-14:30	休憩(10分)
14:30-15:00	②講義についての質問
15:00-16:00	③留学生へのインタビュー準備

① インドネシアの教育についての講義

担当者である中田が、インドネシアの教育についての講義を行った。講義は、インドネシアの学校教育について、さらに、学校教育が導入される以前から存在してきた、地域のモスクで営ま

1) 午後の授業は、通常13時から開始されるが、二日目の授業は、20分遅れて始まった。理由は、3名の生徒が昼食から遅れて戻ってきたためであった。

れるイスラーム学習活動の様子を、映像資料を通して解説した。高校生に分かりやすく解説するには、非常に難しい内容の講義になってしまったが、学校の外で子どもたちが毎日通う学習活動が存在することを伝えることに従事した。映像資料によるインパクトが十分にあったことは、その後の生徒による感想、生徒が試みた留学生へのインタビュー内容からもうかがえた。

② 講義についての質問

インドネシア、カンボジアの講義を聞いた感想、質問を挙げてもらった。

1) インドネシアの講義に対する質問・感想

- ・イスラームに対する驚き
- ・学校と貧困の問題
- ・独立記念式典での行進についての驚き
- ・治安、暴動について
- ・宗教教育について

2) カンボジアの講義に対する質問・感想

- ・援助について
- ・ポル・ポト独裁政治についての驚き
- ・娯楽、スポーツについて
- ・歴史について
- ・政治体制の変化について

③ 留学生へのインタビュー準備

三日目に実施される留学生へのインタビューについて、質問内容を各調査隊で考えてもらった。このとき担当者は、インタビュー時の参考情報として留学生のバックグラウンドを紹介した。

<三日目> 8月4日(日)

午前

時間	活動内容
10:00-10:15	①留学生の紹介 (中田・羽谷)
10:15-12:00	②留学生へのインタビューの実施 (各班)

① 留学生の紹介

インドネシアの留学生として国際開発研究科のムリアントさん、国際言語文化研究科のエフィさん、またカンボジアからは国際開発研究科のノッチさん、教育発達科学研究科のラタさんの4名がお越しくださいました。留学生には現地語もしくは日本語で自己紹介をしてもらい、現地語については授業運営者が通訳を行った。

② インタビューの実施

インタビューは、それぞれの調査班に分かれて実施した。生徒はみな生き生きとインタビューをし、あらかじめ用意した質問以外のことがらについても尋ねることができた。また、留学生から高校生に対して質問をする時間も設け、高校生が積極的に質問に答える姿も垣間見られた。

午後

時間	活動内容
13:00-14:30	①インタビュー結果の整理・発表 (中田)
14:30-15:00	アンケートの実施、レポート課題の説明 (羽谷)
15:00-15:50	②討論会 & 反省会 (中田)
15:50-16:00	記念撮影、修了書授与

① インタビュー結果を報告

留学生に質問した項目とその回答を整理し、発表してもらった。内容を以下に記す。

1) インドネシア調査隊

- 好きな漫画はありますか？また、なぜ好きなのか教えてください。
- 他国の文化が入ってインドネシアの文化に影響を与えることをどう思いますか？
- 日本に来たとき何に一番驚きましたか？
- 日本は好きですか？
- 日本のイメージは？
- 日本の好きな食べ物、嫌いな食べ物。
- 日本とインドネシアの文化の違いで戸惑ったことは？
- インドネシアはトイレットペーパーがないけど日本にトイレットペーパーがあるのが当たり前なんですけど、日本のトイレに入ったときどんな感じがしましたか??
- トイレットペーパーと水で洗うのは、どっちがキレイだと思いますか??
- モスクに行って朗読をしたり、覚えたりするのは、難しかったですか？
- イスラム教では女性の肌をあまり露出してはいけないと聞いたけど、日本の女の子のファッションをどう思いますか？
- インドネシアの文化の中で、「これはどの国よりも優れている」と思うものは何ですか。
- クルアーンを覚えるのに抵抗はなかったですか？
- 日本とインドネシアとどっちの気候が好きですか。
- 日本料理の中でインドネシア料理と似ているのはありますか？
- イスラム教は、豚が食べられないけれど、日本で困った事はありましたか？

2) カンボジア調査隊

- 初めて来たときの日本の印象はどうでしたか。
- 名古屋の印象はどうですか。
- カンボジアと日本の先生はどう違いますか。
- 日本人のことをどう思いますか。
- 日本の「ゆとり教育」についてどう思いますか。
- 娯楽には何がありますか。
- 日本のテレビ番組で人気のあるものはなんですか。
- 日本の料理で好きなものはなんですか。
- またボル・ポトみたいな人が出てきたらどうしますか。
- ボル・ポト独裁政治の時、教育の面で考え方が私たちから見て非常識だと思うのに、反対して訴えた人はいないのか。
- 日本の女子高生のスカートの短さについてどう思うか。
- 日本から援助されるお金などは政府でストップして国民に渡らないと聞いたけど、実際はどうなのか。

生徒の行った質問内容を見ると、講義を通して得られた情報、例えばインドネシアのイスラ

ム教育について、カンボジアのポル・ポト政権時代の教育について、さらに具体的に、留学生に尋ねる生徒もいたことがわかる。その他、留学生がどのような思いで日本を見つめ、生活しているかについても関心があったことがうかがえた。

② 総合討論会、反省会

三日間のサマー・スクールへの感想、意見を述べてもらった。生徒からは主に大学全般についてと担当者について質問が出された。

1) 大学全般について

- ・大学における学部選択 ・進路選択の時期 ・大学での授業 ・就職活動
- ・大学生の一日の生活

2) 担当者について

- ・なぜインドネシアもしくはカンボジアを研究するのか ・カルチャーショックの経験はあるか
- ・夢、野望はあるのか ・大学院生の就職先 ・結婚観

生徒の多くは、今後の進路選択、また大学入学後の生活について質問をし、具体的にどのような準備、対応が必要なのかについて関心があることがうかがえた。また、このサマー・スクールが、大学院生と初めて出会う機会であったと考えられ、大学院生の研究やその後の進路にも興味があるようであった。

3. レポート課題

1) レポート課題のテーマとその意図

第一コース参加生徒には、以下の2つの課題を出した。

【課題1】

あなたは、一年間インドネシアもしくはカンボジアの家庭にホームステイすることになりました。あなたは、何について詳しく調べたいですか？理由とともに400字程度で書いてください。

【課題2】

今後、アジア（アジアの文化、社会、人、モノ）に対して、どのような「自分」でかかわりたいですか？その理由は？インドネシアとカンボジアについて学んだこと、感じたことを通して、800字程度でまとめてください。

2) 生徒のレポートに対する評価

レポート課題への取り組みは非常によく、参加した生徒11人のうち9名が提出した。情報収集、現地でフィールドワークを試みている大学院生による講義、留学生へのインタビューを通して、生徒たちは、今後どのような事柄をさらに調べてみたいか、どのようにしてアジアの人々や文化に関わっていききたいかについて、個性的にレポートを書くことができた。

【課題1】

3日間のサマー・スクールで得られたインドネシア、カンボジアに関する情報を自分の目で直接確かめ、より具体的に理解を深めていきたいと考えていることがうかがえた。

例えば、インドネシア調査隊として情報収集、留学生へのインタビューを試みた生徒たちは、ホー

ムステイを通して、「インドネシアの民族よっての文化の違いを調べてみたい」(女子生徒)、「もっと食べ物詳しく調べたい」(男子生徒)、「イスラーム寄宿塾に行つてその実態を知るとともに、信仰している人の気持ちに触れることができたらいいと思います。」(男子生徒)などとコメントしている。「ホームステイの家族として暮らしてみ、どんな風に違ふのか知りたい。……本を読めばわかると思う人もいるかもしれないが、……その本を書いた人の目でも見たインドネシアの生活と私が見たインドネシアの生活とでは、まったくちがうものになるかもしれないからだ」(男子生徒)という意見もあり、サマー・スクールで得た情報を自ら確かめることへの意欲が見受けられた。

また、インドネシア調査隊の男子生徒が、インドネシアで流行っている日本漫画を調査したことをうけ、カンボジア調査隊の生徒の中には、今度は、自分がカンボジアにおける日本漫画やテレビ番組について調べてみたいと述べた。その理由に「いったいカンボジアでは、どんなことが日本から伝わつてきているのだろうと、すごく気になったからです。」とコメントしている。その他に、カンボジア調査隊からは、「サマー・スクールでは、文学について調べ学習をしたのですが、文学の内容までは見れなかつたので、ぜひ調べてみたい」(女子生徒)や「日本のようにプロ野球球団があるのかどうか調べたい」(男子生徒)という意見が聞かれた。

【課題2】

ここでは課題1との関連から、生徒たち自身が、より直接的にアジアと関わっていく方法をいくつか挙げています。特に、女子生徒から多く聞かれた発言としては、「アジアの国々の教育事情を改善するような研究者になることによって、これらの国にかかわりたい」、「いままで無関心だった募金活動にも協力したい」、「援助を通して発展途上国を助けてあげたい」、「戦争で親をなくした孤児のために、児童寮を作りたい」がある。これらの意見は、インドネシアとカンボジアに代表されるアジア諸国に対しての、高校生からの素直なメッセージである。アジアの国々を「発展途上なもの」それに対し、自分たちの住む日本を「先進的なもの」、とやや単一のイメージで認識しているように思われるものの、上記のコメントを単に優等生的な見解として解釈することはできない。なぜなら、このセミナーを通して、高校生自らが情報収集をただけでなく、現地でフィールドワークを試みる大学院生の話を聞き、また留学生へインタビューをすることで、身近な問題として、自分により引き付けて考える機会を得たと考察されるからである。課題1の生徒の記述にも見られたように、自らが現場に行き、興味関心のある事柄について調べる意志が見受けられたことを考慮すると、「遠い国」だったインドネシア、カンボジアが、少し具体的にイメージできる国へと変化しつつあると言えよう。こうした意見の他に、アジアとの関わりを「現地で日本語を教え」また日本では、「留学生を自分の家にホームステイさせたい」という意見、また、ボランティアなどに参加するのではなく、「胸をはって自慢できる国ではない」日本で、「一生懸命働き、国を豊かにしていきたい。……アジアの一員としてはずかしくない国にしたいと思う」という意見もあり、興味深かつた。

4. 小 括

本コースでは、インドネシアとカンボジアといった、生徒にとって「遠い」と思われるアジアの国を対象に授業内容を設計し、活動を進めた。3日間を通して、生徒たちは、①調べ学習、②講義の聴講、③留学生へのインタビューに取り組んだ。ふだん生徒たちは、高校生活の中で、このよう

な活動を経験することが少ないかと思われるが、本コースワークの過程では、生徒一人ひとりが非常に積極的に活動に参加する姿勢が見られた。本コースの主旨である、「外国の教育について学ぶこと」を通しての国際理解にまで高めることができたかについては、現時点では明らかにすることは困難である。しかし、本コースにおいて、講義の中で、映像等を通して外国の子どもたちが置かれている教育環境を知ったこと、日本で学ぶ留学生との出会いは、何らかの影響を生徒たちに与えたと言えよう。また、コース担当者は、現地でのフィールドワークに従事しており、その際の苦労話、悩み、発見についても生徒たちに話す機会があった。こうした点からも、外国の文化、人々を理解するために必要とされる姿勢について、生徒一人ひとりが考えるきっかけを与えることができたのではないかと考える。

参加した生徒たちにとって、本サマー・スクールでの経験が、今後より主体的にアジア、ひいては世界に関わっていくことへの契機になることを願っている。